令和2年度版

愛顔（えがお）

感動ものがたり

「感動のエピソード」
&「愛顔の写真」

愛媛県

愛顔（えがお）とは？

人と人との助け合い、
支え合いの根底にある「愛」と、
困難にくじけることなく挑戦し、
道が開けた時にこぼれる「笑顔」が
結ばれて生まれた言葉。
愛媛県は、
「愛顔（えがお）あふれる愛媛県」を
目指しています。

知事あいさつ

愛媛県知事　中村　時広

本事業は、愛媛県が提唱する「愛顔（えがお）」を全国に広く発信し、本県の知名度向上と愛媛ファンの獲得につなげるとともに、「愛顔あふれる愛媛県」の実現に向けた機運醸成を図るために実施しているもので、今回で7回目を迎えます。

今年度は、エピソード部門に、47都道府県と七つの国から過去最多の4，961作品、写真部門には、44都道府県から昨年度を上回る5，130作品の応募をいただきました。厚くお礼申し上げます。

受賞作品の選考に当たっては、芥川賞作家で「千の風になって」の作曲家でもある新井満さんを名誉審査委員長として、審査委員長である俳優のイッセー尾形さん、若手俳人のトップランナー神野紗希さん、そして私が最終審査を行ったほか、写真部門については、愛媛県美術会の方々にも御協力をいただきました。

知事賞をはじめとする各賞に選ばれました皆さん、誠におめでとうございます。拝見した作品は、どれも「愛顔」と「感動」がつまった力作ばかりで、選考には大変苦労いたしました。中でも、エピソード部門で知事賞に輝いた二つの作品は、白内障の手術の際、夢に現れ昔の約束を果たしてくれた母への感謝の思い、折り鶴に込められた祖父の深い愛情がえがかれた心温まるものがたりで、審査員一同、胸を打たれました。

新型コロナウイルスの影響で社会に不安感や閉塞感がただよう中、本作品集を多くの方々に御覧いただき、「愛顔」の輪が全国に大きく広がることを切に願っております。

終わりに、応募いただきました方々をはじめ、本事業に御協力を賜りました関係者の皆様に深く感謝を申し上げます。

目次

「エピソード部門」一般の部

「知事賞」「どこか、遠いかなたから」 和田紀世美（京都府）……6
「特別賞」ママ、お手てが切れちゃうよ 高田智子（滋賀県）……8
「優秀賞」目覚しおりん 松田良弘（大阪府）……10
大将だんだん 嶋田数之（京都府）……12
鈍色のそら 杉野典子（愛媛県）……14
「入選」『祖父の笑顔に支えられて』 喜多住香（奈良県）……16
母のＤＮＡ 村上真理（愛媛県）……18
ホクロの使命 小松崎潤（東京都）……20
命を懸けたプレゼント 相野正（大阪府）……22
ジーンズを縫う祖母 佐藤陽平（兵庫県）……24
「佳作」「生きることは、笑うこと」 飯塚朝葵（東京都）……26
愛顔の兵士たち 上原多紀子（千葉県）……27
運転手さんの娘 丸山桜（静岡県）……28
愛媛弁が聞きたい 植松守（愛媛県）……29
約束 鳥居憲一（愛知県）……30
「折り紙細工」 古澤正勝（千葉県）……31
ママの顔 山崎人功（長野県）……32
「私だけのご褒美」 鈴木みのり（静岡県）……33
扶養家族あり、配偶者なし。 橋口悦子（東京都）……34
「初めての笑顔」 安藤英房（静岡県）……35

「エピソード部門」高校生以下の部

「知事賞」『たからもの』　阿部　奏大（愛媛県　高校生）……38
「特別賞」祖父は職人　大田　彩乃（愛媛県　高校生）……40
「優秀賞」「私とおばあちゃんとマスク」　水本　千尋（愛媛県　高校生）……42
魔法の愛顔　村上　力也（愛媛県　高校生）……43
秋の夕暮れ　横山　紗音（愛媛県　高校生）……44
「入　選」「俺らに出来んことはないばい」　瀬戸丸　颯太（愛媛県　高校生）……45
握られた手　堀江　杏（愛媛県　高校生）……46
母の優しさ　中野渡　春迦（愛媛県　高校生）……47
『スイカの種』　山根　大空（愛媛県　高校生）……48
母の愛顔　山光　奈緒（愛媛県　高校生）……49

「写真部門」

『一般の部』
「知事賞」わたしら同級生　鈴木　文代（和歌山県）……51
「特別賞」ママへのプレゼント　二宮　ちあき（愛媛県）……51
「河原学園賞」ご満悦　宮谷　伸司（愛媛県）……51
「優秀賞」泥んこ大好き　古屋　治（長野県）……52
太鼓祭り最高!!　濱本　秀雄（愛媛県）……52
幸せな時間　阿部　喬子（愛媛県）……52
プールは楽しい　高橋　敬二（愛媛県）……53
「入　選」見つめ合ってニコッ♪　小林　いずみ（埼玉県）……53
バードウオッチング？　岩渕　友香（三重県）……54
はじめての菜の花　中ノ﨑慎太郎（愛媛県）……54
変身するよ　田中　雅之（京都府）……54

『小・中・高校生の部』（小学生未満含む）

「知事賞」　結婚51年目　奥村　千桜（愛媛県　中学生）…55
「特別賞」　愛顔同士　三浦　彩楽（愛媛県　高校生）…55
「河原学園賞」　れんげ畑　植杉　里音（愛媛県　高校生）…55

『一般の部』

「愛媛広告協会賞」　黄金色の中で　皆川　春奈（愛媛県）……56
「愛媛県商工会議所連合会賞」　しっかりつかまっていてね！　玉﨑　辰雄（福井県）……56

『小・中・高校生の部』（小学生未満含む）

「愛媛県獣医師会賞」　おそらがきれいだよ！　平松　龍登（愛媛県　高校生）…56
「愛媛県理容生活衛生同業組合賞」　わくわくするなあ　松前　希歩（愛媛県　小学生）…56
「愛媛県歯科医師会賞」　歓喜　下村　萌（長野県　高校生）…57
「愛媛県情報サービス産業協議会賞」　青空の下、今日も私たちは笑顔で顔晴る　森　聖愛（福島県　高校生）…57
「愛媛県ＩＴ推進協会賞」　春から中学生　木村　七海（愛媛県　高校生）…57
「愛媛経済同友会賞」　あっぱれ!!　吉田　恭子（東京都　高校生）…57

「エピソード部門」一般の部

「知事賞」

「どこか、遠いかなたから」

和田　紀世美（京都府）

眼科病棟四階四〇七号室のドアを入ると、窓側のベッドに母が居た。「どうして昨日の電話で知らせてくれなんだの！」と私。「心配かけると思うたし、白内障の手術は簡単と言われたけん」と母。あの朝、いくらかけ直しても繋がらない電話に胸騒ぎした私は、母のかかりつけの先生へ問い合わせ、事を知ったのだった。私は、仕事と家庭の段取りをつけて、広島行きの電車に飛び乗った。親子なのに遠慮なんかして、と、母に腹が立った。

気丈に見えた母だけど、眼の手術は初めてだ。血圧を測られると一八〇もあって、手術の時間を遅らせてくれることになった。私は、母から鍵を借り、勝手知ったる我が実家へ急いだ。母の好きな五木ひろしのＣＤは、すぐ見つかった。それを持って再び病院へ戻り、イヤホンで母に聞かせた。血圧が正常に戻った。無事手術を終えた母の開口一番は、「あ

なたが白内障の手術の時は、お母さん行ってあげるけえね」だった。仮にその時が三十年先として、母は百十一歳になっているはず。

私は、どんな言葉を返したのか覚えていない。

やがて私も七十歳半ばになった夏、白内障の手術を受けることになった。周りは大丈夫よと言ってくれるものの、自分の事になると緊張した。手術台の上で、私は身を固くして手を握りしめていた。ところが気持ちとは裏腹に、ウトウトし始めたのだった。

すると、夢なのか、母が私をのぞき込んでいる。子供の頃、いつも見たやさしい愛顔で私をつつみ、手術の間中そばに居てくれたのだった。私は、とても安らいでいた。

主治医の先生の「はい、終わりましたよ」と言う声で私は我に返った。病室のベッドに戻って考えた。少しずつ記憶が蘇ってきたのだった。母は、約束してくれたことを忘れていなかった。ありがとう…と私は何度も呟いた。私の胸の中で、母の愛顔が灯り続けた。

あの日、母は、どこから来てくれたのだろうと今も思う。

「特別賞」

ママ、お手てが切れちゃうよ

高田　智子（滋賀県）

「ママ、お手てが切れちゃうよ」

手のひらに乗せた豆腐に包丁を入れようとすると、幼稚園児の息子がそう言ってぽろぽろ涙をこぼしました。コロナで息子は園が休み、私もしばらくパートの仕事に来なくてよいと言われたその日、二人きりの昼食に味噌汁を作ろうとしていたときのことでした。

「大丈夫。お手てまでは切れないよ」

私が何度説明しても息子は合点がいかない様子。私のエプロンの端をつかんで、大粒の涙が真っ赤な頬に伝っています。私は手の上で豆腐を切るのをあきらめ、まな板の上で切ってから鍋に投入。おかげで豆腐の角は崩れ、汁のなかで無残にも破片が浮いています。豆腐の美味しさは、そのすっきりとした切り口にあると思っている私は、すんでのところで舌打ちしそうになりかけましたが、ふと、こう思い直しました。

（私のために誰かが涙を流して心配してくれる。大人になってからこんなことがあっただろうか）

私はさっきまで煩わしいと思っていた息子をぎゅうぎゅう抱きしめていました。

思えば私は、それまで息子に、自分が料理をしている姿をほとんど見せたことがなかったのでした。私は朝から晩までパートに行っています。朝食は息子が寝ている間に作ってしまうし、昼は園で給食、夕食はたいてい母が来て作り置きしてくれたもので済ませます。今回、たまたまコロナで互いが家にいる機会があり、こうして息子に私の調理風景を見せることになったのです。もしステイホーム期間がなければ、「ママ、お手てが切れちゃうよ」と身も世もなく泣き叫ぶ息子の姿は見られなかったことでしょう。

愛顔といえば、普通は、笑顔を思い浮かべるかもしれません。けれど、私にとっての愛顔は、自分のことを心から心配して涙をこぼす息子の泣き顔です。その日食べた、豆腐が崩れた味噌汁は、おいしかった。

「優秀賞」

目覚しおりん

松田　良弘（大阪府）

チン！チン！チン！チン！チーン！

我が家の朝の音。階段の下で祖母が仏壇から拝借した〝おりん〟を連打する音だ。その音は、２階で寝ている私に笑顔を届けた。

子供の頃、私は朝が苦手だった。二度寝三度寝は当たり前、何度も学校に遅刻をしていた。そんな私に呆れた祖母が、おりんを使って起こしてくれるようになったのだ。

祖母は足が弱く、階段の登り降りが出来なかった。始めは階段の下から声をかけたが、私には届かなかった。次に階段の手すりを杖でカンカン鳴らした。しかし、これは自分の手が痛くなるらしい。そして考えたのが、この〝おりん作戦〟だったのだ。

「仏さんの声だと思えばあり難いでしょう」

と、いたずらっぽく笑う祖母に、

「バチ当たりなことをしないで下さい！」
母は呆れながらも、2階にいる私を呼ぶ時は遠慮がちにおりんを鳴らしていた。
しかし、このおりん作戦は大成功だった。スッキリと心地のいい朝を迎えられたのだ。おかげで遅刻もなくなり、一日を楽しく過ごせた。それは、おりんに刻まれた祖母の思いが、私にも届いていたからだろう。
戦時中、空襲の度に祖母と子供達は狭くて暗い防空壕に避難した。子供達は怯え泣いていた。そんな子供達のために、祖母は防空壕の中でおりんを鳴らした。おりんの音を拍子に、歌を歌うのだ。祖母達は爆弾の音にも負けない楽しい歌を、いつまでも歌い続けた。
しばらくして、祖母は認知症が進み施設に入所した。そしてその数年後に亡くなった。葬儀には施設の職員の方も来てくれた。
「おばあさん、毎朝決まった時間になると、楽しそうにお茶碗を箸でチンチン鳴らしていました。おかげさまで、私達職員はその音を時計がわりにさせて頂いていました」
今も祖母のことを思い出すと、どこからかおりんの音が聞こえてくる。そして、祖母の愛顔が朝日のように輝いている。

「優秀賞」

大将だんだん

嶋田　数之（京都府）

京都の大学通りにある我が家の近くに、二年ほど前、豚骨ラーメン店ができた。B級グルメ本に紹介され、昼前から学生らの長い行列ができる。狭い道はタバコの吸い殻やゴミが散乱し、近隣の住民は眉をひそめていた。

その風景に三月ごろから変化が起きた。コロナ禍で客足がぱったり止まったのだ。大学が九月までオンライン授業に切り替えたことで、行列どころか客が一人もいない日もある。

店を覗くと、仏頂面の店主と目が合った。

「コロナは困ったもんやね」

ぼくはあわてて取り繕った。店主がじろりと睨んだ。町内会の班長のぼくは、会費の集金でたまに店を訪れる。そのついでに地区住民からの苦情もやんわり伝える。だから店主がいい顔をしないのはよくわかる。

「コロナより先にこっちが逝てまうけんな」

店主は四国なまりで無愛想に言った。
ぼくはこの機会に、じっくり店内を眺めた。「こってり」「濃厚」など脂ぎったメニューの最後に「さっぱりラーメン」というのがあった。
「大将、これは薄味の豚骨ラーメンか？」
「いんや、昆布（こんぶ）と鶏（とり）がベース。若いもんは食わんが、ご近所向けに工夫したスープや。宣伝せんけん、近所は誰も来てくれんがのう」
京言葉の「さっぱり」は「あきまへん」の意味やがな…。でも武骨に見えた店主が実は気遣いのある人だと知って、嬉しくなった。
六月になり「今月末で閉店」と張り紙が出た。コロナのせいだ。
閉店の前日、ぼくは初めて客として入った。ほかに客はいない。
「大将、さっぱりラーメン食べに来たで」
店主は目を丸くし、やがて相好を崩した。
「あいよー。さっぱり一杯、だんだーん」
麺を茹でる店主の顔が湯気で汗ばんでいる。
店主はさり気なく顔をぬぐった。それが汗でなく、うれし涙なのをぼくは知っている。店主の、最初で最後、そして最高の笑顔を、ぼくは湯気の中でずっと見ていたから。
大将だんだん。いつかまた食わせてな。

「優秀賞」

鈍色（にびいろ）のそら

杉野　典子（愛媛県）

昭和３２年。両親が離婚して父方の祖父母に育てられていた私は、東京に移り住んでいた父親に引き取られた。中学２年の春だった。

新しい家に着くと新しい母がいた。とても優しい人だった。父は日本橋の製薬会社で働いていて羽振りもよく、松山の小さな家とは一転して、私専用の部屋と大学生が使うような立派な机と椅子が与えられた。とても嬉しかった。転校した中学では「なもし女」と松山訛を馬鹿にされ仲間外れにされたが、優しい両親のことを思えば耐えることができた。

しかし半年後、両親の態度が豹変した。義母に子供が産まれたのだ。全ての関心は赤ん坊に注がれ、私は義母に言われるまま毎日みんなの洗濯とおしめを洗った。手があかぎれでひどく痛んだ。お弁当も作ってはくれなくなった。日曜日はいつも父と母と赤ん坊の３人で外出し、夜は私ひとりでご飯を作って食べた。もう希望も何もなくなってしまった。

そんなある日、学校で写生大会があった。描(か)きたいものなど何もなかった私は、ただ空だけを描いた。晴れていたのにもかかわらず私が描いた空は鈍色(にびいろ)だった。

「面白いもの描いてるな」美術の島田先生がやって来て「そこに黄色やピンクを入れてみるといい。色っていうのは自由なんだ」と言った。その通りにしたら、雲が流れだした。びっくりした。

「何か困ってることがあったらいつでも来なさい」あまりに暗い絵を見て何かを察したのか、先生はそう言って私に微笑んだ。誰かが自分のことを心配してくれる。そのことがただただ嬉しくて涙が溢れた。

その絵は展覧会で賞を貰った。以来、絵のおかげで私はクラスで一目置かれる存在となった。よれよれの服を着ていつも美術室でひたすらキャンパスに向かっていた島田先生。あの時の先生の言葉がなかったら今の私はない。

「入選」

『祖父の笑顔に支えられて』

喜多　住香（奈良県）

大学時代の私は、初めて習う中国語に悪戦苦闘していた。中国人留学生に発音を教えてもらったり、中国語の先生に特別に指導していただいたり……。英語よりも中国語の方が漢字だし分かりやすいのでは。これからはアジアの言語も話せるようになっておかないと。そんな簡単な理由で学び始めたことを後悔した。しかも、夏のこの時期になると、反日感情をあらわにするニュースが流れることも多く、気持ちが沈むこともあった。

そんな私の様子を見て、祖父が中国語で話しかけてきた。何となくわかるような、わからないような。初めて聞く祖父の中国語に驚きが隠せなかった。

「おじいちゃん、中国語話せんの!?」

祖父は、今まで見たこともない笑顔で語り始めた。

「おじいちゃんはな、戦争で中国の南方に行ってたんや。仲間たちが皆（みな）、戦死したり病死したりしていく中を、必死に闘ったんやで。それで終戦を迎えたんや。すぐに殺されてもおかしくない状況やったんやけども、おじいちゃんは中国人に救われたんや。近くの家の中国人が、中国の服に着替えさせてくれて、中国語を教えてくれたんや。それで中国人みたいに生活させてもろて、引き揚げ船で日本に帰って来られたんやで。人間、生きるか死ぬかの状況になったら、言葉なんてすぐに覚えられるもんや。世話になった中国人のおかげでおじいちゃんはここにいるんやで。」と。

祖父の笑顔は、中国の方々への感謝の気持ちでもあり、家族の元に戻ってこられたことに対する喜びでもあり、辛かった戦を忘れようとするものでもあった。

今、仏壇に立てられている祖父の笑顔を見る度に、その会話が思い出される。毎朝毎晩（まいあさまいばん）手を合わせる時に見るその写真の笑顔は、やさしかった祖母の優しい笑顔と並んで私の背中をそっと押してくれているような気がする。おじいちゃん、おばあちゃん、頑張るよ、私。

「入選」

母のＤＮＡ

村上　真理（愛媛県）

母が亡くなってもう20年以上過ぎている。私は、その時の母の年齢をすっかり越えた。母の同級生の姿を見かけると、元気だったらあのくらいなお婆ちゃんになっているんだろうなぁと想像してみる。中学生の時から寮に入り、高校は松山に出て来て、短大も県外に出させて頂いた。20才になってからやっと地元に帰り、結婚するまでは実家で暮したが、それも2年ほどで、母と一緒に過ごした時間は、なんだか少なかった様に思う。

私は三人姉妹の次女。姉も妹も、近くに住んでいるので、会いたくなれば会える。それぞれ生活があるので、いつでもと言う訳にもいかないが。私が早く結婚した為か、姉妹で若い時に一緒にした思い出も少ない。今頃になってやっと、三人で何かする時間も出来た。母の話も時々するのだが、それぞれの母との思い出が違い、姉や妹から、私の知らない母

を教えてもらったりする。少し前の話になるが、妹と話していた時の事。身ぶり手ぶりで話していた私の手を見た妹が、「姉ちゃん！手が母さんにそっくり。母さんの手のひらはこんなだったよ。本当に似てる。」と言うではないか。私には母の手の記憶がないので、ビックリだった。自分の手はあまり好きではない。土や草花が好きで、素手でさわる事も多く、紫外線にもさらされて、歳よりもずいぶん老けた、かわいそうな手になっているからだ。まさかこの手が母にそっくりなんて。あまり労わってもやらずに、働かせ過ぎている私の手。こんな所に母が居たんだ。ジワっと心の底から嬉しさがこみ上げてきて、この手が愛しく思えた。

忙しさにかまけて、やっぱりこき使っているのだが、母のＤＮＡがこの手のひらにあると思うと、優しい気持ちになれるし、愛顔にもなれる。私のＤＮＡは今度は誰のどこに、ひき継がれるのかなぁー。嫌だ！なんて言われませんように。

「入選」

ホクロの使命

小松崎　潤（東京都）

僕の前髪は長い。眉毛は見えないし、目だって半分隠れている。それにはちゃんと理由がある。額の大きなホクロだ。僕の額には一センチくらいのホクロがある。小学生の時はよく『大仏』とからかわれた。それはもう恥ずかしくて、とにかく悔しかった。前髪で隠せばたちまち視力は落ちた。大人になったらこのホクロを絶対取ってやる。僕はずっとそう思っていた。

あれは僕が二十歳（はたち）の時だ。実習で小児病棟へ行った。ここには難病で苦しむ子ども達が沢山いた。彼らは虚ろな目をしてベッドに寝かされていた。何本ものチューブで繋がれ、腕には無数の点滴の痕。もう言葉がなかった。

「いっぱい笑わせてあげてね。愛顔は治療薬だから」

そう言うのは実習担当のナースだ。しかし彼らを前に僕はギャグのひ

とつも思い浮かばなかった。「かわいそう」では言い尽くせない、辛さや儚さが、確かに、あった。

だけどそうもしていられず僕は大胆な行動に出た。

「見てごらん？だいぶつー！」

思いきりかき上げた前髪。突如現れた巨大なホクロに思わず少年が笑った。見れば隣にいるお母さんまで申し訳なさそうにクスクス笑っている。それはもう涙が出るほど恥ずかしかった。でも涙が出るほど嬉しかった。確かに笑わせることは高等技術。だけど笑われることなら僕にでもできる。こんなホクロでも誰かの愛顔を守れるのなら幸せじゃないか。そう思った。

あれから僕は「大ちゃん」と呼ばれ、病院の人気者になった。相変わらずうまい話もギャグも言えないが、いるだけで周りは愛顔になる。そんな愛顔をくれるホクロが今はものすごく愛しい。

今日も子ども達を愛顔にする。

しばらく美容外科に行く必要はなさそうだ。

「入選」

命を懸けたプレゼント

相野　正（大阪府）

ベッドに座って窓の外を見ている妻の横に並んで腰かけた。妻は末期のガンだった。

七階のこの病室の窓からは妻が通った学校や職場、我が家の辺りも見える。妻はここから毎日、家に帰って行く私を見送りながら、この景色を見ていたのだ。見送るのは寂しかったと、今日初めて本音を口にした。

妻は「この街で」という歌が好きだった。この街で育ち、恋をして、母になる。おばあちゃんになっても好きなあなたとこの街を歩きたい、という人生賛歌だ。だが、孫が生まれておばあちゃんになった今、妻が毎日見ているのは、苦労続きだった人生が、もう終わろうとしている景色だった。

手を取ると何も言わず強く握り返してきた。痩せた背を撫でてやると、こう言った。

「ありがと。気持ちいい。このままで逝けたら一番いい。お父さんに撫でられて」

妻は痛みや苦しみから解放されて静かに逝くことを望み、延命治療は

拒んでいた。
「お母さん、今夜から僕がここに泊まるからね。これからは決して一人にしないから」
むくんだ足をさすりながらそう言うと
「死ぬまで？」と妻は聞いた。
「いや、死んでからもや、で」と私。
「嬉しい。ありがと」
妻は少女のような笑顔で私に微笑んだ。それが妻の最高で、最期の笑顔だった。
「もうすぐお誕生日ね。そこまでは無理かな。だから今、おめでとうを言っとくね」
三週間ほどで私の誕生日、そこからまた三週間で妻の誕生日が来る。
私はただ泣いた。
やがて意識がなくなった妻は、望み通り苦しまず、深い眠りの中で静かに旅立った。
その日はなんと私の誕生日、その日だった。
妻から命を懸けたプレゼントをもらった私は、夫婦位牌を作り二人の戒名を刻んだ。約束通り向こうでも一緒に暮らせるように。
私の胸には、あの夕景（ゆうけい）に紅く染まった妻の愛くるしい笑顔がいつも浮かんでいる。

「入選」

ジーンズを縫う祖母

佐藤　陽平（兵庫県）

大きな穴が開いたジーンズを衣替えの時に燃えるゴミに捨てようとした時、「もったいないから修理に出したら。」と母は言った。

修理をする人は当時九十歳の祖母。

祖母の家は二駅分の距離で歩いて行けるが、社会人にもなると、なんだか会うのが恥ずかしくなってしまっていた。

お盆とお正月くらいにまで減ってしまった。

「ミシンを使って手先を使えば認知症の予防になるんじゃない」と母は言った。

「はいよ。任しといて。」と祖母は言った。

祖母は同じ色の布をあてて穴を修理した。

近くで見たら継ぎ接ぎしている事がわかるものの、街を歩いても気付かれない出来具合を祖母は一日で仕上げた。

ジーンズに穴が開く度に祖母の所へ持っていくと大いに喜んだ。

ジーンズを持って行く時、修理後に取りに行く時に僕に会える事が嬉

しいようだ。
「上着でも下着でも何でも縫うからいつでも持って来ておいでね。」
と祖母は笑顔だ。
祖母が九十歳から僕の服を修理し始めて、もう四年も経った。
認知症を心配するどころか、ますます祖母は健康になり、会う度に満面の笑顔だ。
お陰様で祖母に修理を頼むようになっての四年間、一度も衣服を買わずに済んでいる。
衣服代を節約出来ているから、ういたお金で祖母に何か買いたいが、何が欲しいか聞いても、「早く良い嫁さんを見つけといで」の一点張りだ。
ジーンズを修理してくれた事をきっかけに、祖母の所へ会いに行きやすくなったが、今となっては祖母を一番笑顔に出来るのは、嫁を見つけて、ひ孫を見せに行くしか手はない。
ジーンズに穴を開けるよりも難しい問題だ。
「祖母よ。長生きして待っていて下さい。」
「待ちくたびれて、旅立たないで下さい。」
長寿の秘訣は待たせる事かもしれない。
家族が増えて、笑顔も増えるその日まで。

【佳　作】

「生きることは、笑うこと」

飯塚　朝葵（東京都）

「今、私は息をして、強く生きようと前を向いている。」たったそれだけのことが、とても難しく、辛いと感じていた頃があった。

小学二年生、今では思い出すことも出来ないような些細なきっかけから、私は酷いイジメにあっていた。初めはクラスメイトから無視される程度で、あまり気に留めていなかった。しかし、歯止めの効かない子どもの遊びは怖いもので、次第にその内容はエスカレートしていった。机の上に置いていた本の帯が破かれ、体操服が消え、ジャングルジムから落とされた時には、足の骨を折った。

共働きで、なかなか会えない両親には、骨折の原因を聞かれてもはぐらかし、イジメのことも相談出来ずにいた。

そんな時、私が出会ったのが「おっしょさん」だった。母方の大叔母の誘いで、三味線を始めた私に、週に一回・二時間の稽古をつけてくれたのが、おっしょさんだった。

九十間近には見えない、凛とした佇まいに、着物がよく似合う人で、笑顔が誰よりも素敵で、会う度「自分もこんな風に歳を重ねたい」と思えた。

忘れることの出来ない彼女の言葉がある。イジメを打ち明けはしなかったが、どこかで私の苦しみに気づいてくれていたのだろう。

「生きることは、お三味線を弾くようなものですから。色々な音があって、色々な弾き方があるんですよ。その時その時で、状況も生き方も変わるということです。でも、一番大切なのは、弾き手の笑顔なんですよ。良い音も、悪い音も、笑顔でうまく誤魔化せたりできるんですよ。」

衝撃だった。誰のどんな言葉よりも自身の心に響くものがあった。それから、私が笑顔で登校するようになると、イジメはパタリとなくなった。

そんなおっしょさんが亡くなった今も、私は彼女の命日を笑顔で迎えることにしている。彼女の笑顔は、誰よりも愛で溢れていた。

「佳作」

愛顔（えがお）の兵士たち

上原　多紀子（千葉県）

納戸の整理をしていると、十五年前に亡くなった父のアルバムが出てきた。父が生きていたら、今年、九十五歳になっているなあと懐かしく思いながら、頁をめくった。

すると、セピア色の軍隊時代の写真があった。当時、学徒兵の父は、飛行機に乗り機体ごと敵機に体当りする特攻隊だった。出撃すれば、生きて戻ってくることはできない。

軍服姿で軍刀を握りしめ真直ぐ前を向いて立っている二十歳の父。その視線の先には、死の覚悟があるように思える。

数人の兵士らと共にくさむらで座っている写真もあった。訓練の合間、一服しているのだろうか。皆（みな）、一様に目を細め大きな口を開け歯を見せて笑っている。今にも笑い声が聞こえてきそうだ。

軍隊生活は、毎日、上官に殴られる辛い日々だと父は言っていた。そんな生活の中で、どの兵士の顔も楽しそうに輝いている。命令が下されれば、死んでしまう運命なのに……。こんなにも明るく笑っている。何を話しているのだろう。私は写真をじっと見詰めた。

出撃の当日、父の飛行機だけ故障で飛べなかった。仲間の兵士たちは敵に激突し、無残にも散華してしまった。この兵士たちが……。私は思わず、指先で写真をそっと撫でた。

出撃から数日後、終戦となる。復員した当初、父は死ねなかったと軍刀を抜いて暴れる日が続いた、と祖父はよく話していた。

戦争の話になると、決まって不機嫌になる父だが、毎年欠かさず靖国神社に参拝していた。自分だけ生き残ってしまったという後めたさを抱えながら、父は戦後を生きてきた。

今頃、あの世で戦友たちと会っているだろう。侘びているだろうか。そう思い写真を眺めると、愛顔の兵士たちは、「謝らなくていいよ。それより一緒に笑おうよ」と言っているようだった。

了

「佳　作」

運転手さんの娘

丸山　桜（静岡県）

深夜まで職員室に残り仕事に追われ、気付くと終電の時刻は既に過ぎていた。財布の中を確認した途端、絶望が襲う。…二千円しかない。忙殺され、お金を下ろす暇もなかった。

電話でタクシーを呼び、校門前で乗り込むと遠慮がちに伝えた。「すみませんが、…方面に、二千円で行けるところまでお願いします」「先生も大変だね。こんな遅くまでお疲れ様」

父と同年代くらいの初老の運転手さんは優しい笑顔で労わってくれた。その一言が、疲弊し切った体と殺伐とした心を癒してくれた。

メーターが二千円ぴったりになったところで私は降車し、タクシーは再び走り出した。

街灯もない深夜の暗い夜道を心許ない気持ちで歩き出す。家まで歩くと一時間はかかる。重い溜息を吐き、空っぽの財布と虚ろな心を携え、疲れ切った体を引きずり暗闇に怯えながらのろのろ歩いた。…と、その時、先程のタクシーが数十メートル先で路肩に停車した。運転手さんが窓から顔を出し、手招きする。

――え？私、タクシーに忘れ物でもした？

慌てて駆け寄ると後部座席の扉が開いた。

「やっぱり、同年代の娘を持つ父親として、こんな夜道に放り出せないよ。もし、君に何かあったら、私は一生後悔する事になるしね。さあて、今夜は終業だ。だから、今からはお客じゃなく、私の娘ってことで乗って帰りなさい。なあに、私の家も同じ方向だから気にしなくていいよ」運転席の窓から覗く優しい顔は、父が娘を心配する顔そのものだった。

「…ありがとうございます」溢れ出す涙を堪え、深々と一礼すると、「子供らのために夜遅くまで働いている先生は国の宝だよ。だから、大事にしなきゃな」と温かく笑ってくれた。

家に着くと丁重にお礼を伝えた。だが――

…え、家が同じ方向って、嘘だったの？

Uターンして逆方向に走り去ったタクシー。彼の優しい嘘が身に染み、思わず泣き笑いで見送った。あの夜、ほんのひと時でも運転手さんの娘になれて、私はとても幸運だった。

「佳　作」

愛媛弁が聞きたい

植松　守（愛媛県）

今から二〇年位前の、銀行員をしていた時のことです。

東京支店の預金の役席をしていた時に、窓口に二〇歳くらいの青年が口座開設のために来店しました。

振り込め詐欺の問題や口座売買等の理由で東京支店の近隣にお住まいの方や、愛媛県内の企業との取引が有る場合を除いては、原則、口座開設をご遠慮願っています。まして、その青年の住所は千葉県。

大手のパン製造工場に勤めているとの事で、給与振込口座開設に来店されました。

わざわざ電車賃を使い、一時間近くもかけて東京支店に口座を開こうとすることに疑問を感じ、お近くの金融機関で口座を開設することをお勧めしました。

「そうですか?」と寂しそうな声で答えられたので気になって、再度、何故、一時間もかけて口座を開設に来られたのですか、と聞くと、愛媛県新居浜市から出て来たばかりで、たびたびは来れないかもしれませんが、せめて、月に一度でいいから、給料を下ろしに来た時に、愛媛弁を聞きたいからと答えてくれました。

すぐに口座開設の準備をすると同時に、給料を下ろしに来る時でなくても、都内に出てきた時や用事がない時でも、何時でもいいから元気な顔を見せてくれる様にお願いしました。

「有難うございます」と笑顔いっぱいの顔で返事をしてくれました。それから毎月、給料を下ろしに東京支店に寄ってくれる様になりました。

地方から出てきて、なかなか友達も出来なくて寂しい思いをしている若者は、いっぱいいると思います。

そんな若者が、愛媛弁が聞けるだけで元気になる。

その時のことが、今も忘れられなくて、時々、思い出します。

「佳　作」

約束

鳥居　憲一（愛知県）

私は戦争末期に日本が統治していた台湾で生まれ三歳の時に引き揚げて来た。

数年前から自分の生まれた場所を知りたくて戸籍謄本に書かれている台湾の地名を頼りに台北を訪れた。その地名は日本時代の町名で今の台北には無かった。多くの台湾人に尋ねたが昔の地名の場所を知る人に出会わなかった。

落胆しあきらめようとした二年前、偶然、台北植物園で老人に逢った。苦労して生誕の地を探していると話すと、「そこ知ってますよ、私はその隣の町に住んでいました。日本時代の地名ですから今の人たちは知りませんよ」と流暢な日本語で言う。「私は日本人と一緒の教育を受けました。自分は日本人だと思っていました。日本時代は良かった。日本は台湾のためにとっても良いことをしてくれました。この植物園も日本人が造ってくれたのです。あなたの生まれた場所にご案内しましょう」と親切に連れて行ってくれた。当時の話を聞きながら生誕地へと向かった。もっと父母の暮らしていた頃のこと、私が生まれた場所の当時のことをいっぱい聞きたかった。しかしその日は帰る予定の日で飛行機の時間が迫っていたので次回訪台するときに会いましょうと約束して台湾を去った。

約束の日、約束の場所で待っていたが老人は来ない。私の周りをうろうろする人がいた。「日本人ですか」と聞いて来た。「はい」と答えると、彼はあの老人の甥だと言う。甥が？　どうして老人は来ないのだろうと思うと、甥は老人が亡くなったことを告げた。驚きで全身の力が抜けた。

老人は私との約束を守ることを甥に託していた。感動した。

甥と奥さんは私を台北市を見下ろせる高台にある墓地へと誘ってくれた。手を合わせると涙が止めどなく流れた。ありがとう、ありがとう。感謝、感謝でした。

「佳　作」

「折り紙細工」

古澤　正勝（千葉県）

郵便受けに一通の封書が届けられていた。開封すると今から四十年前、当時小学五年生であった加藤康夫君からの便りである。

当時の康夫君は、登校拒否児であった。前担任から「毎朝、康夫君の家を訪問し登校を促す毎日であったが、成果もなく先生に引き継ぐのは耐えがたい」と力ない言葉であった。

康夫君の母親からも登校拒否の事情を聞き、翌日から毎朝、康夫君の家へ登校を促す日々が始まった。康夫君の部屋まで案内され、声を掛けても一向に返事が返ってこない日々が続き、徒労に終わってしまいそうであった。

冬休みの終わり頃、康夫君の家庭を訪問すると、玄関のたたきに精巧な折り紙細工が落ちていた。母親に折り紙細工を見せると、康夫君の折ったものであった。折り紙細工をしていた康夫君に

「素晴らしい怪獣の折り紙細工だね」と、声を掛けても返事はなかった。

翌日、康夫君の家を訪ね私が作った怪獣折り紙細工を康夫君に見せると

「先生、やるじゃん」と、初めて口を開いてくれた。たった一言であったが、嬉しかった。「明日の午後来て欲しい」と、康夫君からの言葉があった。翌日、尋ねると康夫君から私をミニチュア化した精巧な折り紙細工が渡され

「この作品はプロだね」と褒めると

「時間はかかったが、たいしたことはないよ」と、素っ気ない返事であった。三学期の初めの日に折り紙大会をするので、出席をお願いすると「先生が担任なら学校へ行きたくなった」と、約束をしてくれた。

さっそく折り紙大会が始まり、康夫君の作った恐竜の折り紙細工が最優秀に輝き、拍手で迎えられると、笑顔いっぱいの康夫君がクラス全員に頭を下げた。初めて笑顔の康夫君を見て、目頭が熱くなり涙を拭いた。

手紙には現在、玩具（おもちゃ）工場を経営しています。経営者になれたのは、先生のご指導で立ち直ったからだと思っていますと、結んであった。

「佳作」

ママの顔

山崎　人功（長野県）

長生きすると若い頃には想像もしなかったようなことがおきるが、父親が急逝して母一人子一人になってしまった小学五年生の孫の良太は、家庭の事情で転校してから登校を拒んで家にこもるようになってしまい頭痛の種となっていた。

小学校が夏休みになった時に私は田舎暮らしを提案してみた。農業を生業（せいぎょう）としてきた私は自然界のもろもろが人を癒し慰め励ましてくれることを知っていたので、ひょっとしたらと期待したのである。

初めて見ること聞くこと触ることばかりなので、少年の日日は新鮮で興味に溢れているらしく、顔色も良くなり喋る言葉も少しずつ多くなっていったが、笑顔らしい笑顔はなく心の扉が開く気配はなかった。鶏の餌やりと卵集めは日課となり、薯（いも）を掘ったり玉蜀黍（とうもろこし）を採ったりメロンや西瓜（すいか）を撫ぜたり、蜻蛉（とんぼ）や蝶を追ったり甲虫（かぶとむし）を探したりしていたが、餓鬼大将だった頃のことを思い出した私は泥んこ遊びも面白いぞとけしかけてみた。土と水は不思議なもので忽ち良太は目を輝かせてのめりこんでいった。

「これは恐竜のテラノサウルスでさ、こっちは宇宙戦艦大和だよ」

「ほー、よくできてるぞ。それじゃ、良太のママの顔を作ってみようや。絵を描くよりも面白いぞよ」

滴る汗も拭わずに泥の塊を指とへらで整えていた。

「あれー、じいちゃんが作ったママの顔は美人で若いけど、僕の作ったママの顔は少し老けてるねえ。アハハハ……」

なんと天眞爛漫な笑顔だろう。太陽と土の慈愛が生んだ本物の愛顔だと私は思った。

「おでこに一本皺を入れると、アハハハ、ママにそっくりだよ。ハハハ……」

母親の苦労は分かっているのだと思うと私は安心して、大口開けて孫と一緒に笑っていた。

「佳　作」

「私だけのご褒美」

鈴木　みのり（静岡県）

「明日は一人で来なさいね」

五歳の子供にしてみれば、それは厳しい言葉であり命令とも解せるものかもしれない。でも、あの時の私は単純とも思えるほど素直に「はい」と答えていた。それは、そのミドリ先生が大好きだったからだ。

入園からひと月、私は母の自転車で登下校していた。先天性の難病を持ち発育も遅かったからだ。でも、ミドリ先生は私の先々を見越して、そこにメスを入れてくれたのだ。

翌朝、私は母の心配を振り切って一人で出発した。我慢できぬ母はそっと尾行したという。歩道橋・坂道など自転車なら体感しない試練を私は必死に越えて行った。止まらず振り向かず。小学校に隣接する園は、その運動場を横切って行くのだが、異常に小さな私は児童達の好奇の目を浴び、一気に取り囲まれる。でも私は怖じもせず泣きもせず、その囲みを両手で押し分けて前へ進む。それが三度ほど繰り返され、私は園に到着した。

私の無事の登園を見届け、我が子のいじらしさに咽び泣きながら母は帰ったそうだが、私にはまだ続きがあった。

教室の前で、ミドリ先生が待っていてくれたからだ。自転車登園と異なって、私の頬は紅潮し汗ばみ、先生の言う通りに一人で来た達成感を全身に帯びていたのだろう。

「おはよう、みのりちゃん。ちゃんと来れたね！頑張ったね」

先生はそれ以上褒めなかったが、私は〈ああ、これが本当の先生の笑顔だ〉と、私だけへの先生の笑顔で充分嬉しく心に刻んだ。

あの小さな一歩は、後年のイジメや闘病など様々な苦難に立ち向かえた生命力を養う礎であったと思い返す度、ミドリ先生の笑顔に感謝が絶えない。

私は五十歳となり、今もミドリ先生とは折々に便りを交換戴いている。先日は、風鈴の絵手紙を戴いた。母の老いの加速に曇っていた顔が、その優風（やわかぜ）で笑顔に一新された。

「佳　作」

扶養家族あり、配偶者なし。

橋口　悦子（東京都）

その夏、私は就職活動に奮闘していた。面接では決まって同じ質問をされた。

「お子さんが病気の時、どうしますか？」

娘はまだ四歳。私は離婚したばかりだった。いくら頑張ろうとも、三十路のシングルマザーに世間が優しいはずもなかった。

応募した一社からの連絡で、半ば諦めムードの中面接に向かった。

課長は、笑顔が印象的な男性だった。

「他にお子さんを見てくれる人は居るの？」

またいつもの質問だ。

「いえ。急なお休みを頂く場合も、精一杯仕事に支障が出ないよう努力します。」

今回も落ちたなと肩を落としたその時、課長がニコッと微笑んだ。

「じゃあ、明日から来られる？」

「えっ？」

「採用します。」

満面の笑みで課長が言った。

信じられない思いで、あまりの嬉しさに久しぶりに私も笑顔がこぼれた。

入社後、課長は慣れない職場環境の私を積極的にサポートしてくれた。

「この子の顔がタイプで採用したの。」

そんなセクハラまがいの冗談を言いながらも、郵便物の開封作業までも手伝ってくれた。

慌ただしく三年の月日が流れ、出向組の課長が本社へ戻るため送別会が開かれた。

普段は冗談ばかり言う課長が、真面目な顔つきで私に言った。

「面接の時、あなたの履歴書を見たら、扶養家族あり、配偶者なしに丸がついていて。ああ、この子は絶対採ってあげなきゃと思ったの。就職活動中々大変だったでしょう。」

課長は笑顔でゆっくりとビールを飲み干した。その時初めて本当の採用理由を聞き、その優しさに私は顔がぐちゃぐちゃになる程泣いた。

この春、娘は晴れて社会人になった。

一番苦しかった時に、私を救ってくれた人。あの優しい笑顔へのご恩は、一生忘れない。

「佳　作」

「初めての笑顔」

安藤　英房（静岡県）

その人が笑っている顔など見たことがない。何もかも気に入らないと、この世の全ての物や人に対して怒っているようなおっかない顔をしていた。話しかける気にさえならない。

困ったことにその人の家の前は燃えるゴミの置き場だった。ゴミの日ともなると、ネットをかけてあっても猫やカラスが集まり、ゴミ袋をつつきひっかき破って中身をあさる。

回収車が来る前に一度や二度は道路一面にゴミ袋の中身が散乱してしまう。きっとそのことも彼のおっかない顔の一因なのだろう。ひょっとしたら主因なのかもしれない。

感嘆するのは朝生ゴミを出す時どんなに周りにゴミが散乱していても、回収車が来るまでにはきれいに片付けられ、生ゴミの袋には外されたネットが再びかけてあることだ。間違いなく、彼がやってくれている。

休日の朝、鼻歌まじりに生ゴミを出しに行くと、いつものように周り一面にゴミが散乱していた。ここは俺が何とかしようと思った。

やり始めると、凄まじい苦役だった。使用済みのマスク。腐臭を発する生肉。卵の殻。中身が残った紙パック等々。息を止め、目をつぶって拾い集め、ゴミ袋の中へ戻してゆく。

途中で何度やめようと思ったことか。しかし、あの人はいつもこんな辛い仕事をしてくれているのだと思い直し、やり抜いた。

作業が終わった時、彼が無言で一部始終を見守っていたことに気づいた。大声で言った。「いつも大変な片付けを有難うございます。今日は時間があったのでお手伝いさせて頂きました」と。彼は満面の笑みを浮かべた。

報われたと、その笑顔は語っていた。誇ることも傲ることもなく。他人から讃えられることも感謝されることも知られることさえなくとも。彼は黙々と己の仕事を続けてきた。

たった一人でも自分の仕事の真価をわかってくれた時、人は本物の最高の笑顔になる。

見とれるほどいい笑顔。けれど日本二だ。日本一は彼の笑顔を見て浮かんだ私の笑顔だ。

愛顔感動ものがたり

ー愛顔感動ものがたり映像化コンテストー

愛媛国際映画祭では、愛顔感動ものがたり 感動のエピソードを原作とする、映像化コンテストを開催しています。
感動のエピソードを原作とした、今年度の受賞作品をご紹介します。

受賞作品一覧

グランプリ

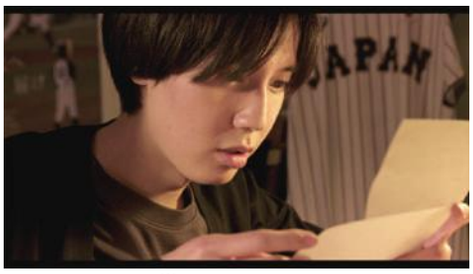
増田　晶子　原作：佐伯　篤典『映画』

初めてこの原作を拝見した際、男の子の微妙な心の動きに
美しさを感じました。そしてそれをリアリティと繊細さを持って、
映像化したいと思い、制作に踏み切りました。
この様な貴重な賞を頂き、本当に光栄です。ありがとうございます。

準グランプリ　伊藤　ゆかり
原作：三好陽花里『七夕の願い事』

優秀賞　松山東高等学校放送部
原作：野本　浩愼『思いやる気』

入賞　山田　衣織
原作：黒光　優陽『ぎちぎち弁当』



入賞　エンカクテイ
原作：野本　浩愼『思いやる気』

入賞　境　晃史
原作：野本　浩愼『思いやる気』

審査委員特別賞　伊予高等学校
原作：弓岡　夏鈴『本当の「愛」』

審査委員特別賞　三崎高等学校
原作：黒光　優陽『ぎちぎち弁当』

審査委員特別賞　松山南高等学校放送部
原作：黒光　優陽『ぎちぎち弁当』

受賞作品は愛媛国際映画祭HPで公開しています。ぜひご覧ください。
愛媛国際映画祭ホームページ

EHIME INTERNATIONAL FILM FESTIVAL
愛媛国際映画祭

「エピソード部門」高校生以下の部

「知事賞」

『たからもの』

阿部　奏大（愛媛県　高校生）

おじいちゃんは、僕に会うたびにいつも折り鶴を一羽くれる。僕が折り鶴をくれる意味を知ったのは、高校生になってからだった。

僕の記憶にはないけど、おじいちゃんは僕が産まれてすぐの頃から折り鶴をくれていたらしい。幼稚園児や小学生の時には、おじいちゃんが優しい笑顔で『ほれ、かなた折り鶴じゃ。』と言って渡してくれていたことをはっきり覚えている。小さい頃は僕を喜ばせるためにしてくれていると思っていた。しかし、それは違うんじゃないかと中学生になった僕は感じていた。

中学生になると、折り鶴にお小遣いを挟んで渡してくれるようになった。内心、

「お小遣いは嬉しいけど、中学生にもなってまだ折り鶴くれるんだ。」

と思っていた。しかし、不思議に思ってはいたものの、折り鶴をくれる時のおじいちゃんの笑顔が僕は大好きだったので、いらないなんて思う

ことはなかった。

高校生になったある日、おじいちゃんに会いに行った。もちろん折り鶴をくれた。僕は高校生になった今でも折り鶴をくれる理由を知りたくなって、おじいちゃんに聞いてみた。するとおじいちゃんは、

「かなたに会うのがわしは嬉しいんじゃよ。だから折り鶴を渡して、形としても思い出に残しとるんじゃ。」

と少し照れくさそうに言った。僕は不器用なんだなあと思いながらも、心が温かくなって自然と笑顔になっていた。その後おじいちゃんの部屋に呼ばれたので行ってみると、そこには色とりどりの折り鶴がたくさんあった。おじいちゃんは僕に渡していた折り鶴と同じ色で同じ数だけ折っていたのだった。

今、僕とおじいちゃんの部屋にはそれぞれ６２４羽の折り鶴がある。この折り鶴は、不器用で照れ屋だけどとても愛が詰まった、おじいちゃんと僕をずっとつないでいてくれる、世界で一番大切な『たからもの』だ。

「特別賞」

祖父は職人

大田　彩乃（愛媛県　高校生）

私の家は、車屋さんだ。田舎にあるそんなに大きくはない車屋さん。そこで私の家族は働いている。

私は小さい頃、たくさん夢があった。その中の一つに「車の塗装をしたい」という夢があった。これは祖父の影響である。祖父は、車の塗装をする仕事をしている。父や母、祖母、父の弟は車の整備や営業、車検などをしている。祖父だけ仕事内容が他の人と違う。そんな家族の中で唯一というところに最初はひかれたのだった。祖父の仕事に興味を持った私は、祖父の作業場にたくさん行くようになった。作業場にはいろいろな物が置いてある。塗料の入っている缶、紙やすり、塗料と混ぜる薬品、スプレー、ブラシ……何も知らない私には全部が新鮮で魔法の道具に見えた。気になる物があると、質問をした。祖父が作業を始めると、じっと横から眺めた。そのたびに祖父は優しく丁寧に、幼い私でも分か

るように説明をしてくれた。しかし、塗装中は薬品や塗料を使うため、近くで見ることはできない。そんな時間は退屈でもどかしかった。でも、嫌いじゃなかった。作業が終わって時間がたつと、その部屋に入れてくれた。私は感動した。塗装前に色を落とされグレーになっていたパーツが元通り、いや、それ以上につやのあるきれいな白に染まっていたのだ。これは祖父にしかできない魔法のような技術だと思い、心から尊敬した。傷が無くなり、きれいになった車をお客さんにお返しする。その場にはいつも祖父はいない。ただ、嬉しそうに車に乗って帰られるお客さんを見ると、私は祖父が誇らしくて笑顔になるのだった。歳をとっても職人のように仕事をしている祖父は、今でも私の憧れの存在である。

私の家は、車屋さんだ。田舎にあるそんなに大きくはない車屋さん。そこで私の家族は働いている。今日もたくさんのお客さんの車を修理している。大切な車を直し、笑顔で愛車と共に帰ってもらえるように。

「優秀賞」

「私とおばあちゃんとマスク」

水本　千尋（愛媛県　高校生）

新型コロナウイルスによってマスク不足が大問題になっていた。マスクを付けていないと、「マスクないの？なんで付けないの？」という目で見られてしまう。まるでマスクを付けていない人に人権はないとでもいうような顔の人であふれている。

ある日、私はマスクを買うために外出した。みんなマスクを手に入れたくて、開店前から行列ができている。私はマスクを付けていなかった。知らない人からの視線を痛いと感じた。怖くて、私はどうしたらいいんだろうと思った。そんな中、一人のおばあちゃんに声をかけられた。「あんた、マスクないんか。これやらい。」ジャージ姿で、怒った感じのするおばあちゃんから、紙マスクが差し出された。ちょっと怖い雰囲気のおばあちゃんで、本当にもらっていいんだろうか……ととまどったけれど、そのマスクを付けて、私は冷たく突き刺さる視線から解放された。晴れてマスクを買うことができた後、改めておばあちゃんにお礼を言うと、「このご時世だから、仕方ないよ。」と言われた。

私がそのおばあちゃんと再会したのは、朝の登校途中だった。それ以来、登校途中の道ばたでたわいない話をするようになった。おばあちゃんは毎朝四時に起きてラジオ体操をしているとか、八十七歳にしてすべて自分の歯であることが自慢なのだとか。最近行ったおいしいお店の話やニュースの話もする。私は学校の宿題の話や、実習でパウンドケーキやパンを焼いた話をした。実は、おばあちゃんは明るく気さくで、人と話をするのが大好きなのだとわかった。

今では、おばあちゃんに挨拶をして登校をするのが、私の日課となっている。おばあちゃんは私を見かけると、遠くからでも「ちーちゃん、おはよう。」と声をかけてくれる。私は、おばあちゃんのかわいい笑顔を見ながら「今日も頑張ろう」と思う。

「優秀賞」

魔法の愛顔

村上　力也（愛媛県　高校生）

静かな部屋の中から、笑い声が聞こえはじめた。その笑い声は、とても楽しそうで、大きく、生き生きとしていた。誰だろうと思って部屋をのぞいてみると、案の定、私の大切な妹だった。「また笑っている。」と思いながら、私も愛顔になった。そんな妹は、私からはルビーのようにきらきらと輝いて見えた。

私の妹は重い障がいをもっていた。話すことはできないが、声を出すことはできた。感情もしっかりとあった。悲しいときには泣いて、うれしいときには笑う。私から見たら、ごく普通の人間だった。だからこそ、そんな妹にもとびきりの笑顔があった。妹は、いつも突然笑いだす。何が面白いのか、なぜこんなときに笑うのか私にはわからない。もちろん、私の家族も誰一人知っているはずがない。理由を聞きたくても聞けないのだから。妹の突然の愛顔を見ると、なぜか誰もが愛顔になった。もちろん私も。私は考えた。「妹は周りの人を愛顔にさせる、魔法のような力を持っているのではないだろうか。妹の愛顔は『魔法の愛顔』なのではないだろうか。」と。そんな愛顔は、いつも私の励みとなっていた。どんな辛いときにも、妹の愛顔を見れば元気になれた。しかし、今ではそんな愛顔も見ることができない。妹は、今から三年前に天国へ旅立ってしまった。十年というとても短い人生だった。そんな人生の中でも、妹はたくさんの愛顔を作って私たちにプレゼントしてくれた。私以上に愛顔を見せていた。

今、目を閉じるとあの愛顔が浮かび上がってくる。『魔法の愛顔』が。私は辛いとき、苦しいとき、過去へ帰って、またあの愛顔を見たい、また妹から元気をもらいたい。そんな気持ちでいっぱいになる。しかし、どうやっても過去へ帰ることはできない。いつまでも妹に頼っていてはいけない。だからこそ、妹の『魔法の愛顔』を自分が作れるようになりたい。そう、あのみんなを幸せにする愛顔を。

「優秀賞」

秋の夕暮れ

横山　紗音（愛媛県　高校生）

秋の夕暮れ。私はそれが途轍もなく好きだった。「好き」という言葉では足りないかもしれない。泣いてしまうのだ、夕暮れを見ていると。言葉に出来ない何かに惹かれて、悲しくもないのに涙が零れてくる。

その想いを友人に話すと、決まってこう返ってきた。

「何それ、変。ちょっと引くわー。」

そう言い放った友人が間違っているとは思わなかった。ここまで夕暮れに惹かれる方が変なのだ。そう思ってはいても、ほんの少しだけ、寂しかった。

ある秋の日のことだった。この時期、部活終わりに、三階の美術室から見る夕暮れは格別で、私の日課となっていた。その日の空は橙色（だいだいいろ）と朱色（しゅいろ）が空いっぱいに溶け合いながら、沈みかけの黄色い夕日に集まっていて、大きな線香花火のようだった。あまりに綺麗だったから、私は、やはり泣いてしまった。

そこに部活の後輩がやってきた。彼女は、私が少し泣いているのに気づいて驚いていたが、何かを察してくれたのか、私の隣で「いい夕日ですね。」と笑った。

衝撃的だった。引かれると思っていた。夕暮れを見て泣くなんて、よほど変わっているか、自分に酔っている人くらいだと、私自身思っていたのだから。

それどころか、日がたつにつれ、他の部員も夕暮れを眺めに来るようになった。

一人、二人と美術室の前に人が増えていく。しまいには、顧問の先生までやってきて、部のみんなで夕暮れを眺める時間ができた。夕暮れが特に綺麗な日は、写真に収めて作品にしてみよう、という案も出た。

いつしか、私は夕暮れを見て笑うようになっていた。そのことに気づいて、私はふと、あの時の後輩の方を振り返った。すると、長く伸びた影がいくつも並んでいるのが見えて私は夕暮れ以上に感動するものを見つけたのかな、とまた笑ってしまった。

「入　選」

「俺らに出来んことはないばい」

瀬戸丸　颯太（愛媛県　高校生）

「ミーンミンミンミン」暑い。暑すぎる。高校二年生の夏、暇を持て余していた友人が、ある挑戦をすることを決めた。それは、今治市の島にある展望台に自転車で行こうというものだ。そこへ行くためには片道約六十㎞も漕がなければならない。今思えば無謀だったが、その時の私たちは楽しみで仕方がなかった。翌日、ヘルメットを装着し着替えと飲み物をリュックに詰め込み、朝の八時に出発した。道は自転車専用の道路案内ブルーラインに従って進んでいった。「今治まで四十㎞」という風に一㎞ごとに道路に記されている。「余裕で着くやろ。」なんてのん気な会話をしながら進んでいた。しかし、しだいに足が重くなってきた。

「ミーンミンミンミン」うるさい。暑い。「これほんとうに着くん。」すると友人が「俺らに出来んことはないばい!!」「ばいってなんや。」二人に笑顔があふれた。

お昼過ぎ、ようやく目的地に到着した。展望台から見る景色は最高だった。まるで、富士山に登ったような気分だ。私の目には、日本一の光景だった。ひと息ついたあと現実に戻った。「帰りもあるやん。」その友人の言葉に私は気が遠くなった。

「そしたら帰ろか。」「そやね。」ようやく重い腰を上げて帰路につく。「ミーンミンミンミン」やはり暑い。当然のことなのだが、午後のカンカン照りの太陽の方が百倍暑い。まるで、サハラ砂漠の真ん中で迷子になった気分。ゴールが見えない。休憩を少しはさみながら、約二時間ぐらい漕いだときだろうか。友人が、「お腹すきすぎて倒れそう。」となげいた。私も続いた。「松山に帰ったら牛丼食べよな。」その何気ない会話で心も身体も軽くなった。

もう蝉の声も聞こえなくなった夜。私たちは帰って来た。「やっぱり俺らに出来んことはないばい。」この日食べた牛丼の味を今も覚えている。

「入　選」

握られた手

堀江　杏（愛媛県　高校生）

私の初めての居場所はＮＩＣＵだった。予定日の二週間前、早産を原因とする低体重児として生まれたからである。

そのためか、アルバムの中にある私の写真は、腕に沢山の注射針をつけた写真や、口に呼吸のための管を入れた写真など、なんだか痛々しいものが多かった。風呂上がりに母の横でそれらを見つめながらなんだかカワイソウだと他人事のように思っていた。しかし母は私の横で「かわいいねぇ。」と口にし、決まって笑顔をこぼすのだった。

――こんなに辛そうなのに。私にはどうしても母の気持ちが分からなかった。

高校生になったある日、学校の研究授業の一環として、ＮＩＣＵの見学に行く機会が訪れた。正直にいうと、私の心は不安で一杯だった。カワイソウな自分の写真が頭に甦ってきたからだった。

ついに迎えた見学の日、病院についた私はひどく緊張していた。――どんな子がいてもきちんと見つめよう。そんな覚悟を持ってＮＩＣＵの扉を開いた。

その先には想像よりも様々な状況の子達がいた。しかし赤ちゃんも母親も医師も看護師も誰もが命をつなごうとしていた。カワイソウな子なんて一人もいなかった。

その後、先生の担当している赤ちゃんを抱かせてもらうことになった。私がいた何倍もの時間をＮＩＣＵで過ごし、やっと当時の私くらいまで大きくなったのだと先生は言った。腕の中で身をよじり、必死に何かをつかもうとする彼女は輝いていた。母の笑顔の理由が分かった気がした。――彼女が握った私の人差し指がとても温かかった。

私の夢は新生児科医になることだ。強く優しい母の笑顔を、そしてあの手の温かさをつなぐ一員になりたい。

「入　選」

母の優しさ

中野渡　春迦（愛媛県　高校生）

「雨、降ってきたねぇ。」友人のその言葉で私は窓の外に目をやった。先程までの暗い空に加えてポツリポツリと雨が降り出していた。下校時間になると雨は止むどころか激しくなる一方。傘を持ってきていない私に友人は「こっち入って帰ろや。」と声を掛けてくれた。「ありがとう。」そう言って友人の傘に二人で入って校門まで出ると「傘、持ってきたよ。」お母さんだった。反抗期だった私は傘を受け取らず、「なんでここまで来るん。恥ずかしいけん、もういいし。」心ない言葉を吐いて、友人のところに戻る。お母さんはびっくりしたような顔をしてから、悲しそうな顔をした。帰りは空気が重くなった、友人も気を使い黙っていた。「ありがとう。ばいばい。」友達と別れてから結局ずぶ濡れになって、帰った。

無言で玄関を開けるとタオルが置いてあった。でも、無視して自分の部屋に行った。むしゃくしゃした気持ちのままでいるとお母さんが部屋に来た。「ごめんね。もう学校行かんようにするけん。」苦笑いして去っていくお母さんはまだ仕事着のままで、そこで気付いた。ほんとうならまだ仕事から帰ってきていない時間だった。私の為に急いで帰ってきて傘を持ってきてくれたのだった。そう思うと、自分の情けなさに後悔が込みあげてきた。私はリビングへ向かった。一呼吸おいて、ドアを開ける。いつもよりドアが重く感じたのはきっと罪悪感のせいだ。リビングに居たお母さんと目が合う。「ごめん、傘持ってきてくれたのに。ありがとう。」お母さんは嬉しそうに笑って、「どういたしまして。」と言った。そのとき外は雨だったけれど、私とお母さんの心は雨があがって綺麗に晴れた。

また、雨が降ったら…。今度はお母さんの優しさを笑顔で素直に受け取ろうと思う。

「入　選」

『スイカの種』

山根　大空（愛媛県　高校生）

夏。夏といえば何が思いつくだろう。かき氷、プール、蟬、扇風機……。

私は真っ先に、スイカの種が思い浮かぶ。

去年の夏、私は小学生になったばかりの弟と大喧嘩をしてしまった。弟がしつこく私に絡んできて、当時私は部活で疲れていたこともあり、手を上げてしまった。そこからはもうめちゃくちゃだった。私が殴る、弟も殴る、私が蹴る、弟も蹴る、弟が泣く、私は無視する……。弟は、何もしていないのに急に殴ってきたと主張する。私は、弟に原因があるとして、一向に謝らなかった。

それから一時間後だっただろうか。母が互いに無視し合っている私達兄弟の前にスイカを出してきた。祖母からもらったものだった。私は、むしゃくしゃしていたということもあり、スイカに食らいついた。同時に、スイカの種を思いっきり飛ばしてやりたい気分になり、窓から庭へ飛ばした。それを見ていた弟も、やってみたいと思ったのか私の隣へ来て飛ばし始めた。

「ぜんぜん飛んでないやん。」

「いや、そっちもやろ。」

いつの間にか競争になった。真剣勝負だ。

スイカを食べ終えた時、庭に散らばっている無数のスイカの種を見て、急に笑いがこみ上げてきた。それと同時に、今までなんてしょうもないことで喧嘩してたんだろうと思ってしまった。隣を見ると弟も笑っていた。

「ごめんね、さっきは。」

「こっちも、しつこくしてごめん。」

素直にお互い謝ることができた。スイカの種のお陰で……。

また今年も夏が来た。また今年もスイカの種を飛ばしてやりたい。弟とまた笑いながら。

「入　選」

母の愛顔

山光　奈緒（愛媛県　高校生）

「見てー。これ覚えとる？」そう嬉しそうに聞いてくる母が黄色い花柄の巾着袋を手渡してきた。一度も使われたことがないような様子ではあるが、今にも壊れてしまいそうな頼りなく不格好な巾着袋だった。覚えていないわけがない。これは私が初めて母のために作ったものであるのだから。

私が小学校を卒業した春のこと。子どもの成長を見逃すことなく、たくさんの時間を一緒に過ごしたいからといって今まで主婦を務めてきた母であったが、私の中学入学をきっかけに仕事を始めることになった。そして、その春休みから働き始めた。いつにもまして母は生き生きとして楽しそうだった。私は生まれた時からずっとどんな時でも家に母がいるという生活を送ってきたから、日中に母がいない春休みは新鮮だった。しかしその少し高揚した感覚はとっくに消えて、一人の空間に淋しさを感じるようになっていた。仕事から帰ってきた母は、それに気づいていたのかは分からないが、お互いに今日の出来事についてたくさん話した。そして頑張っている母に何か作ってあげようと思ったのと淋しさを紛らわせるために、次の日、巾着袋を作ったのだ。それを渡した時の母の笑いながら泣いていた顔が忘れられない。巾着袋というよりも、あの時の母の笑顔が忘れられないのだ。

手に持った巾着袋を見つめる私に母が言った。「こないだまで三才やったのに、もう十八になるんか。はやいね。」母は嬉しそうに、でも、どこか淋しそうに笑った。私もいつか子どもができたらこんな風な気持ちになるのだろうか。とても優しい笑顔だった。

母の笑顔が好きだ。嬉しいことがあったとき、悲しいことがあったとき、一番に言いたくなるのは母だ。

そして、母は、どんな時でも愛顔で私の笑顔を守ってくれる。私も、愛顔で人を守れるような、そんな素敵な人になりたい。

「写真部門」

一般の部

知事賞

わたしら同級生

鈴木 文代（和歌山県）

「水門祭り」を見に来ていたおばあちゃん三人。「わたしら同級生」と笑顔で話してくれました。

特別賞

ママへのプレゼント

二宮 ちあき（愛媛県）

ひまわり畑でパパとボクが、家で留守番をしているママにプレゼントしようと、ひまわりを摘んでいました。
あまりにも嬉しそうだったのでその笑顔を撮らせていただきました。

河原学園賞

ご満悦

宮谷 伸司（愛媛県）

7月8日に満一歳を迎える孫娘。半年前から離乳食が始まり、毎回食欲旺盛。今日も大好きなバナナをほおばり、ご満悦。

一般の部

優秀賞

泥んこ大好き

古屋　治（長野県）

木祖村のため池で、工事のため水を抜き、「湖底体験」が企画された。小さな女の子が泥だらけになりながら、魚を追いかけていた。

優秀賞

太鼓祭り最高!!

濱本 秀雄（愛媛県）

新居浜太鼓祭りの山根グラウンド最上段で楽しむ地元の二人。そろそろクライマックスになる頃、最高の笑顔を返してくれました。

優秀賞

幸せな時間

阿部 喬子（愛媛県）

大好きな祖母宅で、おやつに大好きなスイカ。幸せな時間。

入選

プールは楽しい

高橋 敬二（愛媛県）

1才の女の子が生まれて初めてプールで水遊び。楽しすぎる笑顔です。

入選

見つめ合ってニコッ♪

小林 いずみ（埼玉県）

ほとんど寝たきりで無表情なことが多くなってしまった祖母が、娘(祖母にとってのひ孫)と目が合って素敵な笑顔を見せてくれました!

入選

バードウオッチング?

岩渕 友香（三重県）

空を飛んでいる鳥を詳しく見ようと双眼鏡を覗いたのですが、なぜか肌色一色の景色だったそうです。

入選

はじめての菜の花

中ノ﨑 慎太郎（愛媛県）

パパとママに、たくさん初めてをありがとう。

入選

変身するよ

田中 雅之（京都府）

さっきまで私服で詰め所をウロウロしていた男の子も、歌舞伎衣装の着付けが始まりました。レンズを向けた私に、可愛い笑顔を返してくれました。

小・中・高校生の部（小学生未満含む）

知事賞

結婚51年目

奥村 千桜（愛媛県 中学生）

6月に白黒フィルムを使って撮影しました。現像するまではどんな写真が撮れているか分からず不安でした。現像から戻ってきた写真のなかで、祖父母の笑顔がとても良かったので、応募することにしました。

河原学園賞

れんげ畑

植杉 里音（愛媛県 高校生）

可愛い笑顔

特別賞

愛顔同士

三浦 彩楽（愛媛県 高校生）

一緒にいるときは、いつも最高の愛顔。新しくやってきた我が家の二代目ワンコは、家族や散歩中にすれ違う人を愛顔にする天才です。

各　賞

一般の部

愛媛県商工会議所連合会賞

しっかりつかまっていてね!

玉﨑　辰雄（福井県）

こども園のそりすべり大会の写真です。
二人一緒に滑ると楽しいという気持ちが伝わってきました。

愛媛広告協会賞

黄金色の中で

皆川 春奈（愛媛県）

キラキラと黄金色に輝くイチョウ並木の中で、
幸せ家族のたくさんの笑顔の花も舞っているようでした。

愛媛県獣医師会賞

おそらがきれいだよ!

平松 龍登（愛媛県 高校生）

1歳8か月になって、シャボン玉に興味津々な様子でした。
その時に見えた、青空に目がキラキラでした。
ママとの抱っこが嬉しくて、大声を出しながら笑っている
ところです。

小・中・高校生の部
（小学生未満含む）

愛媛県理容生活衛生同業組合賞

わくわくするなあ

松前 希歩（愛媛県 小学生）

学級旗の制作を始めるときの写真です。
これからどんなふうに旗が出来上がるのか、
わくわくしているときの様子を撮りました。

各　賞

小・中・高校生の部
（小学生未満含む）

愛媛県歯科医師会賞

歓喜

下村　萌（長野県 高校生）

クラス対抗の競技で一位になった瞬間の
喜んでいる写真です。

愛媛県情報サービス産業協議会賞

青空の下、今日も私たちは笑顔で顔晴る

森　聖愛（福島県 高校生）

これは大好きな親友と学校に咲いた桜の前で撮った写真です。高校2年生に進級し、勉強部活に追われる中、今年1年間も笑顔で過ごしたいという思いがこもっています。普段の生活でも笑いの絶えない2人ですが、この写真では景色までも私たちを引き立たせてくれているような気さえします。期待と希望を背負いながらもおすそ分けしたくなるこの笑顔で誰かが笑顔になってくれたら嬉しいです。

愛媛経済同友会賞

あっぱれ!!

吉田 恭子（東京都 高校生）

結婚式の時に撮影した写真です。
晴れて結婚をした2人の素敵な姿を見てみんな幸せがあふれる
愛顔を向けてくれました!

愛媛県ＩＴ推進協会賞

春から中学生

木村 七海（愛媛県 高校生）

小学校の卒業式後の写真です。
眩しい笑顔の妹を撮ることができました。

審査委員紹介

新井　満（名誉審査委員長）

１９４６年新潟県生まれ。作家、作詞作曲家、写真家など多方面で活躍。１９８８年、『尋ね人の時間』で第99回芥川賞受賞。２００５年、『この街で』（作詞：新井満、作曲：新井満、三宮麻由子）を制作。

２００７年、『千の風になって』で第49回日本レコード大賞作曲賞を受賞。２０１４年、正岡子規の俳句にメロディをつけ、松山市民の愛唱歌「春や昔」を制作。子どもから大人まで松山市民に愛される曲となる。２０１８年、「石鎚山」を作詞・作曲。

イッセー尾形（審査委員長）

１９５２年福岡県生まれ。
１９８２年より現在まで続く「フツーの人の日常を描く」一人芝居を開始。
一方で映画にも出演。
２００３年「トニー滝谷」（市川準監督）
２００５年「太陽」（アレクサンドル・ソクーロフ監督）
２０１６年「沈黙」（スコセッシ監督）
ＴＶでは「未解決事件警察庁長官狙撃事件」「カルテット」「天国からのラブソング」「トッカイ」「神様のカルテ」など多数。
雑誌「モンキー」にてシェークスピアのカバー小説を掲載中等幅広く活動中。
一貫して人間讃歌を表現し続けている。

神野　紗希（審査委員）

１９８３年愛媛県松山市生まれ。
俳人。明治大学・聖心女子大学講師。
松山東高等学校在学中、俳句甲子園をきっかけに俳句をはじめる。歴代最年少で桂信子賞を受賞するなど、若手俳人のリーダー的存在として活躍。「ＨＡＩＫＵ　ＬＡＢＯ」を立ち上げ、愛媛の観光やものづくりを俳句で発信する。
２０１９年、『日めくり子規・漱石　俳句でめぐる３６５日』で第34回愛媛出版文化賞大賞。著書にエッセイ集『もう泣かない電気毛布は裏切らない』など。２０２０年、最新句集『すみれそよぐ』刊行。

中村　時広（審査委員）

１９６０年愛媛県松山市生まれ。
１９８２年三菱商事株式会社入社。
１９８７年愛媛県議会議員。
１９９３年衆議院議員。
１９９９年愛媛県松山市長。連続３期当選。
２０１０年愛媛県知事。２０１８年３選、現在３期目。

写真部門審査協力

愛媛県美術会理事　日野　義治
同　常任評議員　大内　清俊
同　常任評議員　楠本　真人

表彰式イベントゲスト朗読者紹介

紺野　美沙子

１９８０年、慶応義塾大学在学中にＮＨＫ連続テレビ小説「虹を織る」のヒロイン役でデビュー。
１９８７年、日本アカデミー賞優秀助演女優賞を受賞。
１９９８年、国連開発計画親善大使の任命を受け、国際協力の分野でも活動中。
２０１０年秋から「紺野美沙子の朗読座」を主宰。音楽や影絵や映像など、様々なジャンルのアートと朗読を組み合わせたパフォーマンスを全国各地で公演している。

中川　奈美

ナレーター・声優・歌手。
うわじまアンバサダー。
アニメ「鬼滅の刃」挿入歌『竈門炭治郎のうた』、ゲーム「テイルズ　オブ」シリーズ主題歌、ゲーム「ＧＯＤ　ＥＡＴＥＲ」シリーズなど、多数の歌唱を担当。
劇団シェイクスピア・シアターにて「喋る」ことの本質を学ぶ。
一龍斎春水講談「金子みすゞ」詩作朗読のほか、介護士からの視点を描いたオリジナル朗読「介護士の思い出」書き下ろし・朗読。
師命名の「ぐるーぷ虎」を主催し年３回の朗読公演を行いながら、東日本大震災を受けてボランティア活動の一環として歌・朗読を福島・岩手にて行う。
２０２０年12月えひめキネコ映画祭にて、生アテレコを行った。

水樹　奈々（ビデオ出演）

愛媛県新居浜市生まれ。
声優・歌手
『ＮＡＲＵＴＯ－ナルトー』、『ハートキャッチプリキュア！』、『ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ』など多数のアニメーション作品に出演。
ナレーターや外画の吹替え、ミュージカルの主演、ラジオパーソナリティと多岐に渡り活躍。
アーティストとしても声優史上初のオリコン首位を獲得、ＮＨＫ紅白歌合戦に６年連続で出場、東京ドームや阪神甲子園球場などスタジアムクラスの公演も成功させる。
第64回芸術選奨文部科学大臣新人賞大衆芸能部門受賞。

新井名誉審査委員長メッセージ

愛顔感動ものがたり　によせて

新井　満

悲しみを越えた大きな空に
喜びの虹がかかっています
悲しみ
喜び
人生

バンザイ

令和３年度作品募集案内（予定）

～エピソード部門～

募集内容

「愛顔」あふれる感動のエピソード（ジャンルは問いませんが、「ご自身の体験に基づく内容」を募集します。）日本語で800字以内
例えば…家族や友人、身近な人々との触れ合いや、学校生活、部活動の中での出来事など、どんな感動でも構いません。

募集部門

「一般の部」「高校生以下の部」の２部門を設けます。

募集期間

令和３年５月～８月を予定しています。

応募方法

郵送又は電子メール【作品＋応募票】
※応募票は愛媛県ホームページに掲載予定です。

～写真部門～

募集内容

「愛顔」あふれる感動の写真（ジャンルは問いません。）
例えば…子育てなど、家族や身近な人々との触れ合いの中で生まれた愛顔、運動会などの学校イベントや部活動で見つけた愛顔、ペットや動物が見せる愛嬌たっぷりの愛顔など、どんな「愛顔」でも構いません。

募集部門

「一般の部」「小・中・高校生の部」の２部門を設けます。
※ご自身が撮った写真が対象となります。
（小・中・高校生の部では、撮影した方が小・中・高校生（小学生未満含む）であること。）

募集期間

令和３年５月～８月を予定しています。

応募方法

専用ホームページ「愛顔の写真館えひめ」にある投稿フォームからの応募を予定しています。

お問合せ
愛媛県スポーツ･文化部文化局文化振興課　愛顔感動ものがたり担当
☎089-947-5480　E-mail：bunkashinko@pref.ehime.lg.jp

愛顔（えがお）感動ものがたり
「感動のエピソード」
&「愛顔の写真」

令和三年二月発行

発行　愛媛県
スポーツ・文化部文化局
文化振興課
〒七九〇－八五七〇
愛媛県松山市一番町四丁目四－二
ＴＥＬ（〇八九）九四七－五五八一

印刷　株式会社　美統

■令和元年度　一般の部　知事賞
「あたたかい涙」田後 寛子

■令和元年度　高校生以下の部　知事賞
「映画」佐伯 篤典

「エピソード」部門の知事賞（平成28年度までは知事賞・特別賞）受賞作品については、水樹奈々さんの朗読に合わせたオリジナル動画作品をインターネットで配信しています。

愛顔感動ものがたり　検索